

木の言い分 ②



■公園樹木に将来はない！？

公園樹木の将来とは何であるのかと考えたことがある。自然の森や林なら自分で芽生え、育ち死んで行くのが当たり前なのに、公園の場合は人間が運んで植えつける。植物は自分で移動することができないのであるが、これを「植物は移動なんてしたくない」と考えてみると、公園樹木の取扱いに際し、もう少し畏敬の念を抱いて生育環境に気配りすべきではないだろうか？

例えば公園樹木を植栽するときの土壌改良では、植え穴にパーライトとバーク堆肥を混入するだけで終わることが多い。しかし、必ずではないが、枯れ保障の期間が終わった頃に改良しなかった不良土壌に根があたり枝先から次第に枯れ込み樹形が崩壊していくという皮肉な結果につながる。発注者も根の生育空間である土壌が樹木の将来に大きな影響を与えることを「知ってるつもり？」なのに十分な植栽基盤の整備費を見込むことができないし、設計者も地上の事はわかるが地下は知らないという人が多い。見えない地下より、見える地上の方に予算が回ってしまうのもわからないではないが、やはり土壌改良にきっちりお金をかけることが、樹木の健全育成にとって当然望ましいことは言うまでもない。

さらに公園に植えられた樹木を襲う不良環境には、植栽地の踏圧による害と落葉等の物質循環を阻害する公園管理が大きな影響を及ぼしている。多くの人々の来園を望む公園でもあまりに踏みしめられると樹木の生育が悪化することはよく知られたことである。さらに、落葉をかき集め持ち去るので腐植が形成されずに土壌は一層個結していく。しかし、来園者の利用面積や利用者数を制限することが難しい公園では、管理する側が植栽後の土壌改良など技術的解決方法を試み、また落葉は除去する場所とそのままでいい場所とを区別して出来る限り残しておいた方がいい。地上の楽園と地下の楽土は一体である。

樹木の将来に対して人間が一番害を及ぼす公園の本質を理解するなら、人間空間である地上と同様に樹木の根の生育空間である土壌にも相応の金額を付けて公園を作りましょうというのが私の考えである。土づくりと公園管理の質がどうであるかによって設計者の描く公園の将来デザインを実現するとも考えるが未だ意思疎通は図られていない。発注者である行政から設計者、施工者、管理者、もちろん住民まであらゆるパートの人々が公園樹木の将来や公園そのものの将来について共通認識をもてるように積極的に交流していく必要があると感じているのは私だけか・・・